

音は語る

文藤盛一朗



連載 47

庄司紗矢香の《雨の歌》

憂愁の霧晴れ、注ぎ込む光

千天の慈雨とはこのことだろうか。タガが外れてしまったような世界状況の中で、一見、平和な日本でも、足元が崩れるような不安を覚える。そんなときに届けられた音楽。庄司紗矢香の弾くブラームスのヴァイオリン・ソナタ第1番《雨の歌》は、聴く者の心に沁み込んだ（3月6日、サントリーホール）。

メツザ・ヴォーチェの表現

ジャンルカ・カシオーリが弾く和音が、冒頭からくすしき光彩を放つ。ブラームスは、この和音とヴァイオリンの弾きだしに、ピアノ記号とともに「メツザ・ヴォーチェ」をm.v.の略語で記している。「半分の声で、柔らかな声で」。それは、戦争や生命の破壊の音の対極にある温かく、柔ら



演奏する庄司紗矢香とカシオーリ ©千葉秀河

かな響き。揺るぎなきをも伝えるカシオーリの深々とした低音の和音に導かれ、庄司は、優しく旋律を紡いでいく。

庄司は、もともと信頼するデュオの共演者として、カシオーリを選んできた。ヴァイオリンに付き従う伴奏者でなく、対等の立場で音楽をつくる文字通りの創造のパートナー。2人はカシオーリの住むイタリアで、また、2月26日に始まり、3月7日まで6回行われた今回のツアーの途上

も、議論を重ね、一つ一つの音や旋律の歌い方を究めてきたのではないか。その結果が全曲を支配するメツザ・ヴォーチェの弱音表現だったと受け取れる。

この日の会場は、サントリーホールである。2千席の空間にメツザ・ヴォーチェの響きを行き渡らせるには、音量の細心のコントロールが求められるだろう。庄司の右手は、弓を滑らせるように、また微妙に浮かせるようにレガートを奏でる。半ばで弾かれるピッツィカートも豊かで、温かみにあふれる。第1楽章の

結びは、晩秋の夕暮れ、夜の闇に時が移る前、山肌に輝く光のような味わい。ただ、寂しさではない。

第2楽章では終わりに向かい、ピアノがやはり、メツザ・ヴォーチェで低い和音を奏で、ヴァイオリンは沈み込むような表情をみせる。孤独の深淵。だが、ヴァイオリンが重音を奏でるうちに、曲の結びでは安らぎが生まれる。この日の表現は、その移り行きと静かな平和に重点があったと受け取れた。ト短調の第3楽章は、歌曲「雨の歌」由来の泣きの旋律となる。だが、庄司のヴァイオリンは、ここでも柔らかさを失わない。カシオーリが弾く特徴的な二音の低音の反復も、全曲の冒頭和音に通ずるような土台としての安定と感じられる。憂愁の霧が晴れ、光が注ぎ込むような最終部の表現は聴きものだった。ヴァイオリンの重音は温かく、上行旋律は優しく、聴く者の心をぬくもりで満たすように響いた。

アンコールでブラームスのヴァイオリン・ソナタ第3番第3楽章に続き、弾かれたのは、シューマン《12のピアノ小品》Op. 85から第12曲「夕べの歌」（デュオ編曲版）。静かに、しみじみと旋律の歌われるこの曲は、《雨の歌》の名演を引き継いで結ぶのにこのうえない選曲だった。庄司のヴァイオリンは、ずっと感嘆とともに



東京フィルを指揮するチョン・ミョンファン (撮影=上野隆文/提供=東京フィルハーモニー交響楽団)

たことが弦の合奏が始まって分かる。全プログラムを支配すると思われる敬虔で深い音。そこからあの、ホルンの馥郁とした重奏が始まる。10分ほどのこの曲は、光に対する闇、善を脅かす悪も表現される。だが、光がやはり勝ることが伝わってくる。

岡本誠司がソロを担ったブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番も、その延長として演奏された。高みを目指す旋律。とりわけ第2楽章からは、慈しみやぬくもりが伝わってくる。

後半のメンデルスゾーンの交響曲第3番《スコットランド》の音楽の表情は、一層丁寧に描かれた。第1楽章序奏部の短調旋律のほの暗さ。第3楽章冒頭では、弦による憂愁から慰めの旋律への移り行きが鮮やかに示される。

第4楽章の舞曲風のアレグロ・ヴィヴァーチッシモは、メンデルスゾーンが初稿スコアに「アレグロ・ゲリエーロ（戦闘的な）」と記していたことをプログラム解説で知る。その激しさと、曲想のがらりと変わるコーダへの経過部の呼吸の深さは、チョン・ミョンファンと東京フィルの絆を映す類まれな表現だったろう。テンポが極限まで落とされ、クラリネットとファゴットがピアノニッシモで歌



《千人の交響曲》を演奏するインバル指揮都響 ©藤本史昭

う。それを引き継ぐ弦がさらに弱音を究め、下行した後、全休止がとられた。そこから、マエストロソ旋律が立ち上がってくる。チョン・ミョンファンが、この旋律を聖なる響きと感じ取っていることが分かる。

山の高みで日の出を待つと、夜の闇は一挙に朝の光に移るのではないと知る。薄暮の時間があり、少しずつ明るくなって薄ぼんやりする中に、太陽の光が差しこんでくる。チョン・ミョンファンは、それに似た過程を重んじ、大切なイ長調主題の登場を準備する。巧みな設計と感ぜさせない自然さをもって、その旋律とハーモニーのおごそかさや伝えようとする。聴き終われば、同夜の3曲のプログラ

ラムには、見事に一本の線が通っていたことが分かる。

インバル指揮都響の《千人》 平和祈る聖霊讃歌への共感

この名演の2日前の2月16日には、同じホールでインバル指揮東京都交響楽団によるマーラーの交響曲第8番《千人の交響曲》の公演があった。編成の巨大化という後期ロマン派の粹であるこの曲。パイプオルガン、金管の別働隊を加えた最強音から最弱音まで、その音世界は並外れた指揮の統御によって実現した。

中世カトリックの聖霊降臨讃歌をテキストとする第1部と、ゲーテの「ファウスト」最終場面を用いた第2部の組み合わせは独特であり、マーラーの意図をめぐってはさまざまな解釈の余地がある。だが、長大な聖歌のテキストを克明に引用し、第2部の終結でその主題を回帰させたマーラーは、キリスト教の三位一体の教理に基づく聖霊を賛美する讃歌に本気で思いを寄せていたのではないかと考えてみる。

「争いの縄目をほどき平和の契りを結んでください」「心に愛を注ぎ込んでください」「絶えざる平和を授けてください」(三ヶ尻正訳)……。こうした詩文に基づく音楽は、ベートーヴェンの理想や祈りに連なる。

チョン・ミョンファンと東京フィルハーモニー交響楽団が2月の定期演奏会で聴かせたのも、音の織りなす深いドラマだった（2月18日、サントリーホール）。冒頭のウエーバーの《魔弾の射手》序曲。チョン・ミョンファンは、開始に間を置いた。音楽への集中と献身を楽員に促してい

チョン・ミョンファン指揮東フィル 最弱音と全休止の後の聖なる響き

語られることが多かったように思う。だがこの日、聴衆の心に浮かんだのは、感謝だったのではないだろうか。